

足利義持の禪宗信仰に就て

玉村 竹 一

從來、室町幕府歴代將軍の内、足利義持の父義滿、及び甥義政については、それ／＼北山・東山兩時代を代表する人物として、その思想等について、相當に研究されてゐるが、今こゝに問題にする義持に就ては、未だ確かな論説を聞かない。

一概に貴族の信仰といふものは、雜然としたものが多い。これは自ら求めて得た信仰といふよりは、その地位に接近しようとする多くの宗派の側よりの教化に壓倒されて、そのいづれにも公平に振舞はうとするためであらうか。又は更に進んで、政略・軍略のために諸宗派を利用せんとするために、その甲乙を選ばないのであらうか。しかし、貴族の中にも、稀には、統一ある思想を以て、純一な宗派に傾倒した人もある。北條時宗・花園天皇・後水尾天皇の禪宗に於ける、宇多法皇の眞言宗に於けるが如きは、その好例である。茲に述べようとする足利義持も、亦この一類に屬する人であると思ふ。即ち義持はたゞ禪宗のみを純一に信仰した人といふべきである。この事は、後述する一般的諸事象からも察せられるが、清原宗賢の日記『清贈二位宗賢卿記』甲（『柳原家記録』一五七所收）長祿二年（1468）閏正月廿六日の條に

今朝依召參^{義政}室町殿、於御末一侍所被仰云、^{申次女中新}兵衛督云々、自^{（尊氏）}等持院^{（義教）}至普廣院殿、高野山御參詣事、年號月日并御官御歳等、可注進之由被仰出之、予引見可申上之由申、退出了、^{（義滿）}鹿苑院・普廣院殿等所見、注之持參、

義持
等持院殿寶・篋院殿等時分者、南方合戰也、定不可有御參詣也、

勝定院殿無御參云々、爲禪宗之間、此由以二
無御參數、

女中申入了、申次同
前〇上下略（國點は筆者の附加）

と見えるのによつて、多少年代を経た史料ではあるけれども、一段とこの事を確める事になると思ふ。即ち義持は禪宗に専一であつたので、眞言宗である高野山に參詣を敢てした事がなかつたといふのである。又『蔭涼軒日録』長享三年（1489）五月十二日の條にも、尊氏・赤橋登子・義詮・紀良子・滿詮・義滿・義教・義勝・裏松重子の遺骨を高野山安養院に納めた時の御教書をのせてゐるが、それにも義持のみは入つてゐない。これも他宗に關與しなかつた義持の意旨のあらはれではないかと思はれる。更に『臥雲日件錄拔尤』の寛正三年（1462）（「五十二冊六月中拾遺」）とある部に見える。五十二冊は寛正三年の部なるにより、年代を推定す。拾遺の條に

晚間林光院主來、茶話之次、及勝定相公深信禪宗之事、林光院曰、天臺華王院、曾等持寺八講之時、講罷、與勝定相公談、公問華王曰、所掛袈裟、始於何人、答曰、傳教大師爲猿所製也、短小便於搭之故也、吾輩皆用之、相公曰、我宗已无如此衣云々、華王曰、所謂我宗何宗耶、相公曰、禪宗也、華王曰、宜以諸宗爲我宗、而不見擁護之、何限禪宗耶、相公曰、諸宗无如禪者故也、略○下

と見えるか、義持は、天臺僧華王院主某に對して、禪宗のことを「我が宗」と稱し、「諸宗、禪に如く者なし」と道破してゐるから、之によつて、義持の禪宗に對する歸依專一の自覺を、一層確める事を得る。

二

然らば、義持は、如何様に禪宗を理解したか、その方向と程度について見たいと思ふ。まづ最も形式的な方面から見て行かう。

義持の禪宗との形式上の關係は、蓋しその受衣より始まる。『足利家官位記』及び『臥雲日件錄拔尤』康正二年

(1456) 八月十八日の條によれば、義持は、應永六年(1399)六月二十三日、相國寺鹿苑院に於て、絶海中津より受衣し、「道詮」と安名されてゐる。

三

「道詮」といふ法名について、「顯山」といふ道號(字)が授けられたのであるが、何時頃誰人より受けたものであらうか。『足利家官位記』には、受衣の條に、「號顯山」と記してゐるが、これは後日の記録であり、關聯事項を合攷したに過ぎない。岐陽方秀の『不二和尚遺稿』下「說」の部の「顯山說」に

常德老師、嘗上尊號於相公、所以勸發斯道、而向所謂四海誦仁政者、亦當根于此、○上略
と見え、惟肖得巖の『東海瑤華集』七の「說」の部にも「顯山號說」があり、

副諱謂之字、規祝寓焉、表德謂之號、頌美專焉、我大人相公顯山雅號、乃常光國師之所稱也、晚進後學、豈得而測其授受萬一乎、○下略

とあるのにより、相國寺常德院開祖佛日常光國師空谷明應より受けた事が知られる。よつて『佛日常光國師語錄』を見ると、その卷下偈頌の部に

顯山號 征夷大將軍

高挿蒼穹、遠近看、玲瓏八面絕遮欄、烟雲秀氣增溫潤、草木欣榮極鬱蟠、愛靜仁人甘城奥、入深山客樂居安、
壽興幾時崧岳並、三呼萬歲四方歡

といふ七言八句の頌が見える。道號頌は大抵七言四句であるが、これは型破りである。空谷は應永十四年(1407)正

月十六日に寂するから、受號は、應永六年(1399)受衣より、これ迄の八年間の何時かであつたらう。爾後、一庵一麟應永十四年、『龍涎集』愚中周及應永十六年、『佛德大通禪師語錄』等に、その頌を製せしめたが、應永十七年(1410)四月應永十六年

に、諸禪僧の知道能文なる者に命じて、更にその義を頌し、又は説かしめたといふ。前掲の岐陽方秀の「顯山說」に一品大相公襲爵之三年、惟仁惟政、令_二人誦不輟_一口、天下升平、雖_二彼延天至化、而不_二多讓_一、四海蒼生、何幸耶、又能以佛爲心、弘輔_二吾法_一、而禪徒尤蒙_二庇護_一、是故命_二其知道能文者_一、各述_二別號顯山之義_一、或頌而美_二之_一、或文以揚_二之_一、至矣盡矣、不可_二以加_一矣、一日特降_二鈞旨_一、俾_二不二方秀、復作_二其說_一、略_下とあり、義持の繼嗣は應永十五年であるから、それより三年は十七年に當り、岐陽もこの説の末に「應永龍集庚寅四月と記して居り、庚寅は即ち應永十七年に當る。よつて前掲の岐陽・惟肖のものは勿論、その外に仲方圓伊の説『顯山漫稿』も、西胤俊承『眞愚稿』惟忠通恕『繫驢概』心岳通知『心岳和尚語錄』の頌も、いづれも應永十七年に製せられたものと思はれる。

道號を受け、その頌をも受けるといふ事は、從來の慣例で、足利歷代將軍も、尊氏の仁山、直義の古山、義詮の瑞山、義滿の天山等いづれもこれであるが、これらは恐らく自發的に求めたのではなく、禪僧の方から獻呈したものと思ふ。縦へ自ら求めたとしても、こんなに一時に多くの禪僧に命じて、偈を徴し説を作らしめるといふやうな事はなく、こゝに義持の禪宗部内の慣習への通曉を示すものがあり、それが貴族の遊戲的寮園氣を帯びるものであるにしても、禪宗歸依に専一ならんとする自覺より出發してゐる事を汲みとらねばならない。

四

しかし何といつても、道號はまだ一般通有のものであり、義持が如何に多く頌や説を徴しても、その信仰の特別に篤實な事を強調する事は、未だ早計である。ところが次に別號といふものがあり、禪僧と雖も必ずしも之を有するとは限らないものであり、從來の足利將軍も法諱・道號以外に、之を有する者を聞かなかつたが、義持に到つては、つひに之を稱した。即ち「樂全」又は「樂全道人」といふ稱號を用ひてゐるのである。惟忠通恕の『繫驢概』下に

樞府號樂全道人、次韻呈之、

樂全雖慕龔賢名、參叩深期心眼明、靈鑑高懸天地際、不將佛法作人情、

とあり、「次韻」といふからには、誰人かの本韻があつた筈だが、今日は傳はらない。『心岳和尚語錄』にも「樂全」と題した「情」字の韻の偈があるから、同じく和韻であらうが、これにも何人の韻に和したか註記がない。したがつて何時誰人から受けたかは明確でない。「樂全」といふ稱號は、宋の張方平がその所居に名づけて「樂全堂」といひ自ら「樂全居士」と稱した所であり、『莊子』五外篇「性繕」篇に

古之行身者、不_レ以_レ辯飾知、不_レ以_レ知窮_レ德、危然處其所、而反_レ其性_二已、又何爲哉、道固不_レ小行、德固不_レ小識、小識傷_レ德、小行傷_レ道、故曰、正_レ已而已矣、樂_レ全之謂_レ得_レ志、

とあるのに基づく。惟忠の所謂「龔賢」とは張方平を指すのであらう。義持はその芳躅をふみ、莊子の説を内包した「樂全」を以て、自らの別號とした。如何にも高踏的な趣好を帶び、全く中國の士大夫ばりの貴族趣味への心にくき迄の同化を経た模倣を行つてゐるのである。

この士大夫振りは、南北朝以來、日本の禪僧によつて、盛に鼓吹されたもので、中巖圓月の「中正叟」、絶海中津の「蕉堅」、義堂周信の「空華」、大岳周崇の「全愚」、空谷明應の「若虛」等、多くの例があるが、義持もこの風潮に倣つたものであり、茲に到つてはじめて、義持の禪宗に對する態度に特殊性が出て来る。尤も義持の外に、その龍臣山名時熙が「懶眞」と稱してゐるが、義持を論する時には、常にこの人及び細川滿元・赤松義則・大内盛見の人類の人を同傾向のものとして見て行かねばならない事は後に述べる通りであり、義持はそれらを代表する人物なのである。

義持は更に三條坊門に新第を造營し、應永十六年(1409)十月二十六日に、北山第より之に移つてゐるが、この新第の規模が著しく禪宗寺院の結構をそのまゝ採入れてゐる點が多かつたらしく、義滿の北山第が、相當程度に西園寺第の公家邸宅の遺構を包攝した、寧ろ平安時代以來の寺院邸宅の系統を引くのに對して、これは新しい意味での寺院邸宅を創始したとも言へば言へるものであらう。

當時禪僧は、庭園及び建造物を綜合して一つの藝術品と見なし、特定の建物及び木石山水をとつて境致といふものに指定し、或は六景・八景、又は十境等と稱して、洗鍊された名稱を附してゐた。これは洞庭の瀟湘八景とか西湖の八景といふやうな中國起源のものから系統を辿るべきであるが、又禪宗一流の手法によつて、これら境致の發する無言の問話に對して命名といふ手段によつて答話してゐるものも見得るものである。當時五山をはじめ多くの禪院には、いづれも境致が定められ、之について、名尊宿の詩偈を添へ、或は之を板に雕つて、亭楣に掲げるなどしてゐたものである。義持はこの境致の制を全くその三條坊門第に於て模してゐる。即ち第内に「樞府十境」を定めた。それは次の通りである。

勝音閣(觀音閣)

覺苑殿(佛菩薩殿)

安仁齋(書齋)

嘉會(宴居)

養源(水殿)

探玄(禪室)

要闕(探玄室前の玄關)

悠然(亭)

湖橋

蘸月池

現在十境全部については、惟忠通知(『繫圖概』)・鄂隱慧齋(『南遊稿』)・西胤俊承(『眞愚稿』)の三人の偈頌が残つてゐるが、その他に内閣文庫本の『相國寺住持次第』の中に、悠然亭の詩が附載されて居り、玉畹梵芳が序を作り、東漸健易が跋を加へ、鄂隱慧齋・無求周仲・廷用宗器・仲方圓伊・遠芳一大・惟忠通知・心岳通知・謙岩原冲・太白眞玄・叔英

宗播・西胤俊承・純仲周叡・履中元禮の諸師が詩を連ねてゐる。恐らくはもと詩軸であつたであらう。又『懶室漫稿』の中に「探玄室頌敍」があるから、探玄室についても、悠然亭と同じく詩軸があつたのであらう。恐らくは十境全部について、同様の詩軸があつたに相違ない。なほこの序によれば、大岳周崇をして「探玄」の扁額を書かしあ、大周周裔をして説を作らしめてゐる。

この十境の外に、義持は無言室・栗室・一默亭等の扁額を室に掲げ、惟忠・西胤・鄂隱の諸老をして之を頌せしめてゐる。『繫驢樞』『眞愚稿』『南遊稿』かの有名な「瓢鮎圖」も、恐らくはこの新第の小屏に描かれたものであらう。

このやうな夥しい境致の設定と、之に關する詩偈の作成は、明かに中國の士大夫趣味の移入であるが、それは飽く迄も禪宗を通じての事であつて、直接の中國趣味そのものの鑑賞を自覺してゐる譯ではない。したがつて、この士大夫趣味は、そのまゝ換言して、禪宗趣味とも稱し得る。無言・一默・栗（金栗如來）等、いづれも維摩居士の故事によつて命名してゐるのは、その對象が方丈であつた爲かも知れないが、自ら維摩居士に擬して、佛法の眞の理解者外護者を以て任じてゐるやうで興味深い。

六

さう思つて見ると、義持は全く禪僧としての意識をもつて振舞つてゐるやうである。既に別號を有し、禪苑的第宅に住する事によつても、察知し得るが、更に寮舎の問題によつて、一層よく觀察出来る。

父義滿は、鹿苑院を創め、後これを相國寺の檀那塔としたが、その後義持は、その院内に寮舎イシリヤウ蔭涼軒を創めた。これは當時禪僧が、先師の塔頭の中に、自らの寮舎を創める一般的慣習を、そのまゝ踏襲したものである。即ち相國寺の常徳院は、空谷明應の塔頭であるが、その門下の仙巖澄安が、その中に萬松軒を設けたのと同様で、血縁の父子の關係を師弟の關係になぞらへ、父の創めた鹿苑院の内に蔭涼軒を起したと見る事が出来る。勿論これには、別に一院

を建てる經濟的な餘裕がなかつたといふ理由も考へられるが、それを克服する方法が、このやうに、正しく禪宗の慣習に依られた事は注目すべきである。加之、當時舎を建てる慣習があつたのは、必ずしも塔頭新造の費用を節約するために、その附屬建物たる寮舎の増築を以て我慢するといふ意味ではなく、塔頭激増の弊を矯める爲に、その新造制限の政令が出てゐるので、事實上塔頭と全く同様の規模を持つものを建て、之を寮舎と稱し、いづれかの既成塔頭に、名目上隸屬せしめるといふ、謂はゞ半ば公認の脫法手段があつた。義持の如き地位の人ならば、それにも拘らず新造塔頭を、お手盛りで建てられるものを、敢て寮舎にとどめた點、義持の禪宗に對する肅正的施策の精神を示すものとして、注目すべき事であるが、之については後述する。

なほ義持は、この外に、自らの歸依僧の塔院にも、同様の寮舎を作つた。仲方圓伊の屬する南禪寺牧護庵、在中中淹の屬する西山の南芳院等に、いづれも義持の寮舎があつたやうである。

七

蔭涼軒の事が出た序でに、蔭涼職の事に觸れなければならぬ。蔭涼職として出來上つてしまつたのは、義教の時代であり、之については、唯今は問題外の事になるが、その萌芽としての侍僧の性格をよく見ると、それは禪院の住持の四員の侍者、即ち燒香侍者（侍香）書狀侍者（侍狀・内史・内記）請客侍者（侍客）湯藥侍者（侍藥）にも比すべきものである。既に義滿が妙佗といふ侍僧を隨伴してゐた事が知られるが、義持の代になると、その數は一人に限らず、三・四人の若輩の僧を従へてゐたらしい。古幢周勝とか仲方中正等がその一例として知られる所である、恐らくは四員侍者に擬してゐたに相違ない。それが義教から義政の代になつて、給仕喝食と奉行僧とに分化してしまふのであるが、義持の代には住持の侍者としての傾向が強いやうに思はれる、勿論義持自身は住持を氣取つてゐるのである。

八

義持の禪僧的行爲として次に注目すべきは、畫贊を多く加へてゐる事である。畫贊を加へる事は尊氏や義滿にもあつた事であるが、義持に到つては、全く禪僧的形式によつてゐる。彼に自畫のあつた事は『不二和尚遺稿』をはじめとして、各所に見えるが、それらは大體、尊氏・義滿の系統を引くものである。たゞ注目すべき事は、義持には肖像の贊がある、即ち父義滿及び叔父滿詮の畫像に贊をしてゐる。それが全く禪僧の頂相の贊の形式を踏襲してゐるのである。これは恰も花園天皇宸筆の御自贊の宸影（法印豪信筆、長福寺所藏）と相應するものであらう。

九

以上のやうに、義持は外形的には正しく禪宗の規矩を理解し、之に遵ふやうに行動してゐる事を知つたが、然らば禪宗の信仰内容にどれ程深く入つてゐるか、又どういふ傾向に走つてゐるかを眺めて見よう。

まづ義持の歸依僧は誰であつたかを調べる必要がある。前述の如く、その受衣は絶海中津よりして居り、應永三十年（1493）四月二十五日に出家する時にも、等持院に於て、絶海の影前で、その法嗣元璞慧珙が剃度の師として薙髮を行つてゐる。そして正長元年（1498）正月十八日、その薨去の後は、相國寺内の絶海の塔頭である勝定院を以て、その院號としてゐるのは、その開基である事を表はしてゐる。さうすると、義持の本師は絶海中津であるといふ事になる。少くとも法制的には最も深い關係をもつてゐる。しかし思想的には果してどれ程の影響を受けたであらうか。絶海との交渉には、父義滿の趣好の投影が多分にあると思はれる。義滿と絶海との關係は『空華日用工夫略集』によつて知られるやうに、相當深いものがあつたが、義持が絶海から『信心銘』の講を受けてゐる事が『勝定國師年譜』に

六十八歳、爲ニ大將軍顯山相公、講信心銘、乃爲證ニ孟子書「以制仁義」云々、

と見えるが、絶海六十八歳の年は應永十年（1403）で、義持十七歳の時に當る。しかしその翌々年應永十二年（1405）四月五日に絶海は寂するので、その接觸の期間は短く、その影響も、單なる人格的陶冶にとどまつたものと思ふ。絶海はいふ迄もなく、天龍寺開山夢窓疎石の最後の法嗣で、義堂周信と文筆を以て伯仲難兄難弟の關係に在り、その純粹な詩情の進る處は、政略家の多い夢窓派下には、罕に見る所であり、直截簡明な性格は、能く權勢に媚びる事なく、ために義滿と衝突する事も再三であつた。絶海のこの性格と義持の性格とは一脈相通するものがあるやうに思はれて非常に興味が深い。強ち期間の短きを以て、影響の少きを速断は出来ないかも知れない。

次に目に入るのは空谷明應である。空谷は無極志玄の法嗣、夢窓の法孫に當る。顯山の號を受けたのは、この人よりである。しかし空谷も應永十四年（1407）正月十六日に寂してゐるので、矢張り接觸の時日が少く、空谷は應永七年（1400）から十年（1403）迄の間、天龍寺雲居庵の塔を守つてゐたが、その間に、義持は入山して、臨濟の語要を示されたといふ。即ち『特賜佛日常光國師空谷和尚行實』に

庚辰春、掃雲居塔、○中略

甲申冬、天龍缺主、有鈞旨、起師補之、○中略

其在雲居也、征夷大將軍入山問道、

師示以臨濟語要、至是、又求法諱別號、師爲書顯山二字并偈獻之、乃願近侍曰、華嚴錦冠云、經是心教、

心起名言、詮顯此理、故名爲經、斯語可以證焉、
とある。道號をうけたのも、この時の事である。しかし空谷も義滿との關係の延長と見るべきで、義持の自發的に歸嚮した人とは思へない。

義持獨自の趣好が出たのは、當然の事ながら、父義滿の薨去（應永十五年1408五月六日）以後の事である。『陸涼軒日録』文明十九年（1487）三月十四日の條に

（龜泉集題）

愚語堀川殿、等持院殿夢窓國師信仰之、寶篋院殿默庵和尚信仰之、鹿苑院相公義堂・絶海・太初

（同前）

別而御信仰、（南力）

所々御成時、御點心御齋之交、必命義堂・太初令講經錄、勝定相公〔推〕意仲・大愚・嚴仲、別而信仰之、普廣相公（英文）・瑞溪（周愚）、別而御信仰之○上略

とあり、同書長享二年（1488）二月十三日の條に

昔勝定相公、恕意仲御崇敬之、製金欄法衣贈之、同大愚和尚亦賜之、兩條一樣也、意中・大愚各賜一頂云々○上略

と蔭涼軒主龜泉集證が義政に告げてゐる事が見える。すると惟忠通恕・大愚性智・嚴中周噩の三人、殊に惟忠・大愚の二人には傾倒してゐる。惟忠は建仁寺永源庵の出身で、佛源派に屬し、その法系は

大休正念—鐵庵道生—無涯仁浩—惟忠通恕

となる。文筆に巧で、『雲壑猿吟』『繫驢檄』の二集がある。殊に後者の大半は、義持との關聯による述作で占められてゐる。大愚性智は東福寺大慈庵の出身で、聖一派に屬し、その法系は

東福園爾—癡兀大慧—大海寂弘—大愚性智

となる。大慈庵中に堆雲軒を創め、應永十三年（1496）七月に伊勢安養寺の住持に任ぜられて後、清見・東福・大龍・南禪・東福（再住）・建仁・南禪（再住）普門の七大寺に入寺してゐる。『推雲和尚七處九會錄』。いづれも義持の推舉である。

この外、夢窓派下では、鄂隱慧藏・西胤俊承・元璞慧瑛・玉琬梵芳・大周周喬・在中中淹、大覺派下では仲方圓伊履仲元禮、聖一派下では岐陽方秀・東漸健易、饒慧派下では惟肖得嚴、大鑑派下では希世靈彥、法燈派下では子晋明魏（即ち花山院長觀）といふやうに、あらゆる派の人々と關係がある。その中、鄂隱・西胤・元璞の三人は、絶海中津の法嗣なので、その因縁よりするものであらう。

これらの人は、いつも義持を圍んでその行動を共にし、各所への出遊にも、必ず相伴つてゐる。義持も亦これら諸

僧の庵居を訪れる事を好み、それ／＼の塔頭には、前述の通り、自らの居室たる寮舎を構へてゐる。その交遊の本来の目的は、修禪に在つた筈であるが、事實は寧ろ次第に文雅の會合に化しつゝあつた。その社交場裡に義持を繞る一類の大名がある事に目を向けなければならない。それは前にも些か觸れた所であるが、第一に山名時熙であり、第二に細川滿元であり、第三に大内盛見であり、第四に畠山滿家であり、第五に赤松義則である。これらの人は、いづれも出家して居り、それ／＼巨川常照居士（懶眞子）悦道道歎居士・大先徳雄居士・眞源道端居士・延齡性松居士として、如上の諸禪僧と共に義持を圍み、或る時は高踏的な論談に花を咲かせ、或る時は詩文の會に風月を伴とするといふ譯であつた。その舞臺は、主として三條坊門第であり、そこには、多分に禪院的雰圍氣が漂つてゐたのである。恰も南宋末の宮廷貴族社會の社交をそのまゝ日本に再現した觀があり、嘗て見ない高度の知性と洗練された趣味を玩ぶ貴族的知識階級がこゝに出來上つたことになる。詩の會は時としては頌會として「趙州無字」などといふ公案を題とする事もあつたが、次第に興味の中心は風雅の方に移つてゐるやうである。しかし東山時代のやうな纖弱には到らず、何かそこには勁直な所が窺はれる。以上が五山派の禪僧との關係であるが、之によつて見ると、宗旨の上の交渉は、極めて稀薄なもので、寧ろ文雅の社交關係に在つたやうである。

一〇

義持の禪僧との關係を考へる時、我々は五山派以外に、他の一類の禪僧を考へねばならない事に心付く。

その第一は休翁普賢である。この人は一に普觀又は普寛とも稱し、夢窓疎石の直弟である。（『天龍宗派』）伏見の藏光庵・幽林庵に閑居し、書記以上の位に上らず、庵主を以て自ら稱してゐた、極めて隱遁的な人であり、渡宋天神の説話の成立に一役買つて來た人で、その名は花山院長親（即ち子晋明魏）の『兩聖記』太極藏主の『碧山日錄』瑞溪周鳳の『臥雲日件錄拔尤』に見えてゐるが、崇光天皇・榮仁親王等の公家方に親近し、密敎的傾向が強く、その諱の

「普」字より察するに、恐らく當初は法燈派の人で、東海竺源の門下であつたかと思はれる。東海派下の人は、いづれも「普」又は「一」字を諱の系字として持つてゐるからである。この人は既に義滿によつて召寄せられてゐる事が、山科教言（リトキ）の日記『教言卿記』の應永十三年（1406）十月六日の條によつて知られるから、先代の遺寵とも見られるが、相當に歸依してゐるらしく、愚中周及を招く時にも、大いに斡旋してゐる。（『佛徳大通禪師愚中和尙年譜』）

第二は愚中周及である。この人は、はじめ夢窓門下であつたが、入元して金山の（シツキョウ）即休契了から法を嗣いで歸つてから、一派と斷絶して五山を脱退し、自派を立て、丹波天寧寺及び安藝佛通寺に隠れ、決して足京洛の地を踏まなかつた人である。義持は應永十四年（1407）以來、大いにこの人を景仰し、この年には小早河則平をして法語を求めしめ、愚中は勸發文を草して之に答へてゐる。更に翌十五年、小早河則平を半ば脅迫して、強いて愚中を上京せしめたので、愚中も已むなく、京都の郊外迄上り、伏見藏光庵（庵主は前述の休翁普貫）に到り、義持は茲處で愚中と相看したが、參禮したのみで、一問も發せず、悚然として去つたといふ。ついで東山の等證院に移らしめ、再び參謁して、佛法の至要を問ひ、又『金剛經』の講説を請うた。その後、愚中は夜中ひそかに紀州の禪頭庵に逃れ去つたので、義持は手書を下して再會を請ふが、愚中は法語一篇を以て答へるのみであつたので、更に休翁普貫をして、再上京を促すが、つひに起たず、茲に到つて義持は漸く斷念する。そしてその翌十六年（1409）金山持實をして紫衣を贈らしめ、京都に近い丹波天寧寺に居らしめ、五月には再び持實を遣して更に法語を求めしめ、愚中は坐禪銘を以て之に應じたが、更に父義滿の一周忌に當り、その追修佛事をも設けしめてゐる。（以上『佛徳大通禪師愚中和尙語錄』及び『佛徳大通禪師愚中和尙年譜』）

第三は梅山閑本である。梅山は永平下の曹洞宗の人で

瑩山紹瑾—峨山韶碩—大源宗眞—梅山閑本

と相承する。總持寺に住し、のち小布施正壽の歸依により、越前に龍澤寺を開いて、終に終世中央に近づかなかつ

た。義持は梅山を上洛せしめようとしたが、小布施正壽をしてその旨を傳へせると、梅山は龍澤寺を捨てて逐電してしまつた。今日梅山の寺を出る時の遺書と、之をとゞめようとする正壽の書狀が龍澤寺に現存してゐる。この一件は愚中周及招請の前か後かは不詳であるが、この場合は義持は招請に失敗してゐるのである。いづれにしても、このやうに韜晦しようとする人に向つて、一人強い景慕の念を懷くといふ一つの癖を示してゐるやうである。

第四には松嶺道秀である。松嶺は近江永源寺開山寂室元光の法嗣で、伊豆臨濟寺開山である。はじめ建長寺に實翁聰秀（この人も同じく大覺派）に參じたが、つひに叢林を厭ひ、常陸の法雲寺に復庵宗己に參じ、更に寂室に師事してその法を嗣いだ人である。『松嶺秀禪師行狀』應永二十年（1413）近江の永源寺に住するや、義持は金山持實を使として、名香袈裟を贈らしめ、又その頂相を畫かしめて、日夕の禮拜に資したが、翌年八月、つひに義持自ら駕を枉げて永源寺に松嶺を訪ひ、己の罪業感に就て訴へ、大慧宗杲の法語一段の説法をきき、終日應酬して歸つた。その直後、松嶺は伊豆に旅立つが、義持は例によつて、三回も使を遣はして途中伊勢に於て、之をとゞめようとしたが、松嶺は偈を呈して之を辭し、つひに伊豆臨濟寺に歸つてしまつた。

第五には香林周聞である。香林は無傳阿燈の法嗣である。無傳は龍湫周澤の弟子で、夢窓三世の法孫で、在中中淹とは法眷である。嘗て寂室元光に參じ、隱逸して出でず、法華・楞嚴に精しく、攝津に梅子、出羽に金勝、越に梅山の各庵を創め、洛西に梅熟庵を開いて閉居してゐた。『相國寺塔頭末派略記』『延寶傳燈錄』恐らくは寂室と同じく大梅法常の高風を慕つてゐるらしい事は庵名によつても知られる。その門弟が香林周聞で、出羽の光明寺、山城大光明寺に住し、圓覺寺の公帖を受けた外、隱居して出でず、義持は屢々、梅熟庵に駕を枉げ、その塔「雲松」の命名さへ行つた。

第六に怡雲寂閑である。怡雲は東福寺大慈門派の人で、癡兀大慧の末孫にあたる。入元して道衡平和尙に參じた。『佛德大通禪師愚中和尙年譜』平は即休契了の法嗣で、愚中周及と法眷であり、怡雲は愚中の法姪に當る。大慈門派は

癡兀以來、伊勢の安養寺・無量壽寺を中心にこの地方に傳播し、東密の傳法灌頂を受け、密教兼修の傾向が強い。この人との接近は愚中の媒介によるのであらうか。神護寺に義持の俗躰の畫像があるが、その上に怡雲が賛をしてゐる。

征夷大將軍從一位行內大臣

壽像

至人應世、金鳳玉

麟、非凡非聖、全俗

全眞、筆頭悲願金

剛眼、即現勝軍菩

薩身、

應永二十一年甲午九月六日

佛日山怡雲洙峇董讚 印

以てその關係の一端を窺ひ得る。

右の内、香林・怡雲の二人は、五山叢林の人であるが、隱遁癖の強い部類に屬する。なほその他、叢林の人でありながら、之を厭つて隱栖しようとした古幢周勝を、どこ迄も追ひかけたり、とかく隱遁勝ちの竺心梵密や玉畹梵芳を景慕したり、出世を故意に拒んで、文筆に専念した曇仲道芳や希世靈彦に特に目をかけたりしてゐる。

一

以上を通觀して見ると、こゝに一つの共通點を見出し得る。義持がかくの如く隱遁者を好んだといふ事は、當時の禪宗界の一つの新傾向への理解を示してゐるのではなからうか。應永初期の五山叢林は、一つの飽和點に達し、いろ

いゝるな意味での爛熟状態を呈し、百弊續出の有様であつた。よつて、その反動が各方面にあらはれてゐる。その一つが叢林をいふといふ風潮で、叢林を脱退して地方に下り林下といふ集團を形成する。應永年中は丁度この林下の醸成時代であり、一種新鋭の氣風が林下には横溢してゐた。寂室元光・復庵宗己・白崖寶生がその中心人物であり、義持が景慕した隱逸者流は、殆どこれらの人の系統を引く人々である。さうでなければ叢林の下位に甘んじて、風雅の事又は學問に専念する一類の人に對してのみ好意を寄せてゐる。これらの點より見て、義持は理想主義者であり、復古主義者であり、義滿の時代に放慢に流れ過ぎた禪林の諸施策を、すべて引締め、緊張させる事に意を用ひたやうである。義持は謂はゞ當時の新思潮の理解者として、之を支持する中心人物となつた事になる。前述の如く、高踏的な談論の席上では、必ずやこの新思潮に對する思慕が問題になつたであらうから、當然の歸結として、かうなるのである。しかし、義持の思想傾向を、之によつて、全く叢林を否定し、林下の隱逸者流に純粹になり切つたと斷ずるのは早計である。彼は中央の官僚的禪林たる叢林をも肯定してゐる。しかし、その官寺をして、林下の如くならしめたいといふ理想をもつてゐたらしい。よつて五山官寺に對する綱紀肅正に乗り出す事になるのである。

一二

義持はまづ五山官寺に於ける義滿以來——寧ろ尊氏以來といふべきであらうか——の夢窓派偏重を改めようとしたらしい。その歸依僧も絶海中津・空谷明應・西胤俊承・鄂隱慧藏・元璞慧瑛・玉畹梵芳・大周周喬・在中中淹・香林周聞・休翁普貫を除いては、大愚性智・岐陽方秀・東漸健易・怡雲寂闇は聖一派、仲方圓伊・松嶺道秀・履仲元禮は大覺派、惟忠通恕は佛源派、愚中周及・惟肖得巖は松源派虎岩淨伏下といふやうに各派に互つてゐる。而も最も歸仰の篤いのは、佛源派の惟忠と聖一派の大愚である。夢窓派全盛の當時、誰一人としてその威壓に屈せざる者はない時に、かういふ施策をするのは大英斷である。

この施策は結局人才登用といふ形に歸する。先代義滿は、相國寺を夢窓派の一派獨占の度弟院^{ツチエ}にしてしまつたのと對照的に、義持はその相國寺を、再び十方住持の寺院にしたかつたに相違ないが、流石の義持も、餘りに強大な夢窓派の既得權擁護主張に押されたのか、それだけは敢てしなかつたが、夢窓派以外の名匠を他派から選び、之を相國寺内に居らしめ、以て一衆の提撕に資せしめたやうである。即ち『東海瑤華集』「敍」の部に「贈別益溪上人敍」があり、

佛智師之徒、諱助、常光師稱之^(覺谷明題)以益溪、訪予北山、請解其義、未暇製也、辛卯春、以官命^(舊)藉名于萬年相刹、益溪喜予來、分席蘊真、日夕周旋、

と見え、應永十八年辛卯(1411)の事であり、寺内の蘊真軒に居らしめたらしい。果してこの益溪□助だとか、和叔□間^(東海瑤華集「記」の部「竹雪軒記」)だとかいふ、相國寺内の人が惟肖について策勵を受けてゐるやうである。

同様の意味で、聖一派の栗棘門派の東漸健易をも、同寺の第一座にしてゐるらしい。『不二和尚遺稿』下の「書問」の部に岐陽方秀が太白真玄に宛てた書狀があり、その内容は、東漸が山城安國寺に住するについて、山門疏の作製を依頼する目子のやうなもので、その中に

予法兄東漸西堂、同門之老也、解廣嚴印以來、寄餅錫於相國寺、去十八日領相帖、遷董京安國寺、開堂已擇明月初五日^(中略)東漸名健易、遠江人、嘗司客於建長石室會下^(餘款)、後歷諸職、而在相國居版首^(上略)とある通りである。

なほ十方住持の制度の勵行に力めた。本來は官寺ならば、五山・十刹・諸山いづれも十方住持でなければならぬ筈であるが、既に東福・臨川・相國等の例外を生じた。まして諸山に到つては、誠に有名無實であつた。大徳寺も十刹でありながら、花園法皇の御置文の旨を堅持して、大燈國師法孫の一流相承を主張し、十方住持制をとらなかつた。義持は之をしても、なるべくそれに近づけん爲に、大燈派下には限定せず、やゝ廣く大應派下より住持をとらしめ、

應永二十八年(1431)には、つひに左の如き公帖を出した。『南禪舊記』下に

勝定院殿公文

大德寺住持職事、任先例可被執務之狀如件、

應永廿八年正月廿六日

宗蘭西堂

從一位御判

大上包宗蘭西堂

從一位御判

右至此時代、依爲十刹、以西堂住持如此、

とあるのが是である。この人は大德寺第二十一世であるが、即ち十八世東源宗漸、二十五世禱庵性才は明かに大燈派下ではなく、十四世大器、十五世南周、十六世竺翁が嗣承未詳であるが、恐らくは大燈派下の大燈下以外の人であらう。

なほ尾張妙興寺は、貞治三年(1363)六月十九日に、諸山に列せられてゐるが、その際「大應國師徒管領として、」十方住持たるべき御教書をうけてゐるが、この時代になつて無説景演とか溫中承顯などといふ夢窓派下の人が入つてゐるらしい。これはその規定が勵行されてゐる事を示すものであらう。

一三

更に義持は、叢林の規矩に通曉し、之を規定通りに行はしめんとしたらしい。義持が、禪林の規矩に精通してゐたらしい事は、『臥雲日件錄拔尤』に、誠中中疑が相國住院中に觀音懺法があつたが、その時之を聽聞して、長老が「等爲法界」の「等」字と「爲」字との間に「懺雪罪愆増延福壽」の語を脱した誤を注意したといふ事によつても知られる。彼は主要なる佛事には大抵列席してゐるが、蓬左文庫に「勝定院殿集纂諸佛事」と題する古寫本があり、そ

の内容は、義持の代に行はれた臨座・拈香・小佛事・下火の法語六十六篇を録呈させたものを蒐録したもので、「右謹奉 鈞旨」などと識語がついてゐる所を見ると、義持の旨によつた事は明白である。かくして、義持はその法語の是非を檢し、又は讀過して愉悅にひたつたのではあるまいか。

義持は又大衆の行道の緩急をも戒めたものではあるまいか。その歸係僧惟忠通恕が、應永二十年天龍寺の三月望上堂に於て

三月望上堂問答畢散說原夫、本寺置常牧寮、乃堂中十六員老僧安下之處也、十六人内、抽二僧輪番看寮之外、各在堂裏單々安禪、二六時中、不離被位、蓋解閑却七間僧堂之嘲上也、自餘堂僧、禪誦之暇、内外兼學、遮手潤色此道、或有拘寺役者、是故限以四次坐禪、亦是百丈祖師始設婆林之遺訓也、山僧邇來、每々齋罷入堂、視彼十六被位、坐者纔三四人、或七八人、縱雖居堂内、猶如遊州獵縣之輩、不有究明已事體裁、可惜也、雖然人々一頭水牯牛、有不收而常牧底也否、沉常牧寮每月常住所出費用等繁多、其不自慚愧乎、自今以後、煩維那時々點檢、不遵制者有罰、莫道不言、

結座云、堂中十六老聲聞、幾箇安禪不離群、解道龍宮赴齋後、天臺山頂去看雲、喝一喝、《繫腰板》上「惟忠和尚住靈龜山天龍資聖禪寺語錄」

又仲方圓伊は、應永十六年(1409)建仁寺の冬夜小參に於て、長老たるものの自誠をのべ

是以、竊見今時叢林、有大可慟哭者、或風前月下、擁鼻微吟、或涉獵詩書、求博古學、如是一類、喚之爲風流佳子、亦或既昧宗旨、亦非博覽、深恐后生誹笑、少學印明、密持一道眞言、以禱息災、覓敬愛、亦或空敷教乘名目、自證教學名、如是一類、喚之爲了事衲子、問之宗門的旨、衲僧巴鼻面頰發赤、漫不省識、一旦迫不獲已、出來據位、七縱八橫、欲弄禮語、肚裡黑漫々、無些子力量、如有物掩口、不能吐一詞、到者裡、向這箇冊子上、放掠一句兩句、向那箇冊子上、標竊一句兩句、拈撥將來、做好一段說話、從

頭讀^レ之、花簇々錦簇々、實如^ニ可^レ喜者^一、子細勘辨、痕疵百出、不堪醜拙、譬如^ニ乞兒破席袋裡乞得底物^一、一箇無可^レ充貴人之食、如是自誇好兄弟、如是自稱長老、誑惑無智俗漢、魔魅乳臭兒童、不^ニ啻即今法門罪人^一、他時異日閻羅老子手中鐵棒、有^ニ不肯許^一汝、可^レ不^レ懼乎、可^レ不^レ慎乎、更有^ニ一種剃頭外道^一、撥無因果、欺瞞賢聖、暖衣飽食、空送^ニ一生^一、蓋不^レ足議耳、○上略〔仲方和尚語錄〕上「東山健仁寺語錄」
と言ひ、文學耽溺と、密授の傾向と、教乘への逃避を非難してゐる。これらは、義持が直接命じた證はないが、義持によつて、惹起された、應永年中の肅正的思潮を代表するものといへよう。

一四

以上種々の方面に於て、義持の禪宗との關聯を見て來たが、最後に義持の宗教生活が果してどれ程禪宗に依存してゐたかといふ問題が残る。これは門外漢にとつては、判斷が極めて困難なことであり、その上史料が極めて乏しく、花園天皇・光嚴天皇のやうに詳しくはわからない。

『空谷和尚行實』によると、「巖山」の號をうけた時、その出據について、左右に語つて、これは『華嚴』の錦冠章に出る句で

經是心教、心起名言、詮顯此理、故名爲經、

とあるのによると言つてゐる事で、十七歳の弱年にして、既に華嚴の素養があつた事が伺はれる。『教言卿記』應永十五年(1408)十一月十六日の條に

一、機首座來、北山殿御^(義持)出紫野^(大徳寺)、長老御相看、万法不^レ侶者誰御定、長老著語云、當面逢著、

と見え、義持の方から龐蘊居士の萬法不侶の公案を示して大徳寺長老某に著語を求めた事が見えてゐる。又『臥雲日件錄拔尤』寛正六年(1425)正月二十五日の條に九淵龍蹊の談として

又話勝定院殿嗣位之初、禪教龍象競興、就中、履中和尙、與^(正)猪熊僧匠・華王院等敎家義虎、同在^ニ相公座、因問^ニ履中^一、以^ニ達磨生死是分段變易之内、居^ニ那生死^一、履中曰、不^レ涉^ニ二種生死^一、然敎者細^ニ論增壽變易、別盡別生變易等之事^一、不^レ肯^レ之、相公問^ニ履中^一曰、二生死處、有^ニ一句^一否、履中曰、八角磨盤空裡走、^{下略}
とあり、義持と履中元禮との間の問答が傳はつてゐる。これらは果してどれ程の機縁の語であるかはわからないが、とにかく禪僧との問答商量の例として、興味深いものである。なほ愚中周及や松嶺道秀から與へられた法語があるが、それらは、どの爲政者に對してなされるのと同様な初歩の禪思想、差別を排し、言詮を排する事を説くか、勸善懲惡の語を説くにつきてゐるやうで、あまり、義持の禪に對する造詣について知る事が出来ない。

一五

義持は貴族としては、非常に聰明であつたので、自ら貴族の弱點をよく自覺し、力めてそれに陥らないやうに努力してゐた傾があるその理想主義的傾向、極度に公平を重んずる事などはその顯現である。しかも自ら禪宗の歸依者であるといふ自覺によつて行動してゐるので、これらの傾向が對禪宗策にあらはれ、己に阿諛するものを警戒し、隱遁者を夢中で追ひまはし、從來足利氏と關係の深かつた夢窓派以外の人に歸依僧を求めたりする結果となつた。しかし貴族の弱點は蔽ひ切れず、一知半解の理解に絶大の自信をもち、他をして之に従はしめんとする意識が強い。しかし、乗拂を見てその俊快を喜んだ義満や、陞座法語の長大を好んだ義教や諷經の聲の高いのを望んだ義政とは違つて、禪宗歸依者の自覺をもち、知的には相當程度の正しい理解を有してゐた點に於て、他の歴代將軍より一等地を抜いてゐるといふべきであらう。

—昭和二十六年二月四日稿—

註(一)『蔭涼軒日錄』永享十二年十一月に

十四日、前晚南禪牧護庵中興雲軒火、

廿二日、○中 前十三日晚、南禪牧護庵中興雲軒火、故不可再興之由被_レ仰出、即命_二南禪方丈并牧護庵、

十二月二日、○中 南禪牧護庵興雲軒、其他御_二寄進于牧護庵_一之由被_二仰出_一矣、

とあり、興雲軒は、將軍の進止に任せられた寮である事は、焼失後の再興中止を命じたり、敷地を本庵に寄進したりしてゐるのによつて知られる。又『蔭涼軒日録』永享十一年六月十一日の條に

瑞雲院御成、蔭涼軒、可_レ移_二南芳院御房_一之由被_レ命、

とあり、これは南芳院中の將軍直領の寮を移して、鹿苑院中の同じく將軍の寮である蔭涼軒とするといふことである。その他同『日録』寛正二年二月七日の條には相國寺大智院中の某軒、永享十一年四月十六・十九日によれば同寺勝定院中の靜香軒が、いづれも將軍の寮であつた事を知る。

(2) 鹿苑寺所藏の足利義滿像の贊に

身從_二無相中_一受生、猶如_二幻出諸形象_一、幻人心識本來無、鼎福皆空無_二所住_一、

應永龍集戊子季夏下澣

循詮薰毫九拜書

道詮

顯山の印

とあり、大德寺養徳院所藏の足利滿詮像の贊に

〔心〕〔赤〕〔無實亦〕〔有亦不實〕〔無亦不實〕カ
□如鏡□如□□□無虛□□□□□□□□□□

〔山〕
叔父□□居土壽像、書牖居士偈、以充贊云、

顯山謹識

詮道

顯山

とある。今『景德傳燈錄』福瀧居士章を以て校した。

(3) 『滿濟准後日記』應永三十年四月廿五日の條に

室町殿様、今夕北野御社參、直_二渡_一御仁和寺等持院、今夜於_二等持院_一、密々御落髮、御剃手當院院主惠珙西堂、道號元璞、足利義持の禪宗信仰に就て

(4) 釋迦三尊繪像、并開山國師・廣照國師等御影前ニ於テ御得度云々、去年以來、雖ニ御有増、今日之儀、御隱密之間、諸人不ニ存知ニ云々、自ニ内裏・仙洞、内内可レ被ニ留申・御支度在レ之、故ニ殊御隱密歟、今夜亥刻計、御落髮、大名等少々懸ニ御目ニ云々、管領・右京大夫・山名・赤松・大内等入道大名計、今夜被レ召ニ御前一略○下
牧野信之助氏編の『越前若狹古文書選』に左の二消息あり。

愚僧は逐電仕候上ハ、龍澤寺ハ我寺にてなく候、ともかくも、旦那之御計たるへく候
八月十一日

謹上 小布施殿

就レ可レ有ニ御上洛ニ上意之赴、捧ニ愚狀之處、御離山之由承及候、無ニ勿躰驚入候、早々御歸寺、其外可レ爲ニ目出ニ之由、被ニ仰出候、上様御意ハ雖ニ聞食被レ及候、遠國御事候間、態有御下向、無ニ御請ニ之者候之條、非ニ御本意ニ之由、連々上意候キ、依ニ思食餘候、可レ有ニ御上洛ニ之由、雖被ニ仰出候、甲斐委細注進申候之間、此上者重不レ及ニ仰出候、尙々年來御所望之間、被ニ仰上候ツ、可レ有ニ御哲寺ニ之由候、私能々可レ申旨候、恐惶敬白

八月十二日

(小布施正壽)
兵部大輔(花押)

進上 龍澤寺方丈

衣鉢侍者禪師

之によると、義持は、わざ／＼越前下向をも辭さない熱心さであつたらしい。

(5) 『龍寶山志』ニ三歴代住持籍に

世十四 大器 和尙

世十五 南周 和尙

世十六 竺翁 和尙

世十七 大模宗和尙 嗣ニ言外、○下略

世十八 東源 和尙

十九 乾用宗和尚 嗣 德翁、翁嗣 徹翁、○下

世 二十 季周和尚 嗣 天象、象嗣 徹翁、○下

二十 香林宗 和尙 嗣 月庵、

二十 華藏 和尙

二十 巨岳 和尙 大模門人、

二十 椿岩宗和尚 嗣 無碍、碍嗣 徹翁、

二十 穆庵性和尚 嗣 南浦 ○下

二十 養叟宗和尚 嗣 華叟、略 文安二年八月廿八日、奉 改 二十 利復 元弘舊規、

本書は、大抵嗣法記事を具するが、今問題の人には、之を缺く。

東源宗漸は『教旨郷記』によれば、山科教旨の息で、建仁寺天潤庵系の人、恐らくは可翁宗然か大用宗任の門弟であらう。

圓福寺の住持になつてゐる。穆庵性才は『天陰語錄』によると

南浦紹明―通翁鏡圓―德翁祖碩―竺源 仙―穆庵性才

と次第する人である。なほ香林は

南浦紹明―峰翁祖一―大虫全岑―月庵宗光―香林宗簡

と相承する人である。

(6) 尤も義持も爲政者であるので、國家的行事又は慣例となつてゐる五壇法や後七日法等をとゞめた譯ではない。しかし三寶院の満濟准后との交際にしても、わづかに一二の受法をうけたのみで、法の上の關係は乏しく、却つて満濟は義持に強いられて禪宗の行事に随伴し、禪宗への理解を深めてゐる。なほ花山院長親の後身たる子晉明魏との關係は、殆ど和歌の上に限られるので、あまり觸れなかつた。

なほ本篇は義持の性格全般を觀察した上の所論ではないので、その公正な人物評論とはなり得なかつた。終に辻善之助博士『日本佛教史』中世篇ノ三に負ふ所が多く、又昨年十二月二十三日、國學院大學國史學會席上、岩橋小彌太博士より、種々御教示を賜はつた事を附記する。

足利義持の禪宗信仰に就て